

部員各位

平成26年6月7日
政治経済学部三年 櫻井大智

神は妄想である

The God Delusion

Written by Richard Dawkins

【目次】

0. はじめに
1. すこぶる宗教的な不信心者
2. 神がいるという仮説
3. 神の存在を支持する論証
4. ほとんど確実に神が存在しない理由
5. 宗教の起源
6. 道徳の根源——なぜ私たちは善良なのか？
7. 「よい」聖書と移り変わる「道徳に関する時代精神」
8. 宗教のどこが悪いのか？ なぜそんなに敵愾心を燃やすのか？
9. 子供の虐待と、宗教からの逃走
10. 大いに必要とされる断絶？
11. むすびに
12. 参考文献

0. はじめに

神は存在するだろうか。一般的に宗教意識が低いとされる¹日本人に対してこのような問を行えば、おそらく多くの人が否と答えるだろう。しかし、御存知の通りこの地球上の多くの国や地域には宗教が非常に強く根付いており、宗教に端を発するような様々な事件が起こっている。それらは無宗教論者からすれば愚行と呼ぶほかない。

本著は、生物学者であり科学啓蒙家のリチャード・ドーキンスが、宗教の異常性を示す数々のケーススタディや無宗教論者への反駁への再反駁を通じて、宗教（特に唯一神教）と宗教が深く根ざす現代社会を痛烈に批判したものである。

1. すこぶる宗教的な不信心者

「私は人格神を想像しようとは思わない。世界の構造が私たちの不完全な五感で察知することを許してくれる範囲で、その前に立ち、畏怖の念に打たれるだけで十分だ」

アルバート・アインシュタイン

ドーキンスは、書題にもある delusion を「矛盾する強力な証拠があるにもかかわらず誤った信念をずっともちつづけること」と定義している。加えてその多数性については、「ある一人の人物が妄想にとりつかれているとき、それは精神異常と呼ばれる。多くの人間が妄想にとりつかれているとき、それは宗教と呼ばれる」というロバート・M・パーシグの言葉を援用している。

さて、ドーキンスは神の概念について、以下のように分類している。

- a. 有神論者 (theist) は、そもそもこの宇宙を創造するという主要な仕事に加えて、自分の最初の創造物のその後の運命をいまだに監視し、影響を及ぼしているような超自然的知性の存在を信じている。多くの有神論的な信仰体系においては、神は人間界の事柄に密接にかかわっている。神は祈りに応える。罪を赦し、あるいは罰する。奇跡をおこなうことで世界に干渉する。善行と悪行に思い悩み、私たちがいつそれをおこなうかを（あるいはそうしようと考えるときえ）知っている。
- b. 理神論者 (deist) も超自然的な知性を信じているが、その活動は、そもそも最

¹文部科学省の平成二十五年度宗教統計調査によると、日本における宗教の信者数は、神道系が100,939,613人、仏教系が85,138,694人、キリスト教系が1,908,479人、諸教系が9,114,049人、合計で197,100,835人である。

初に宇宙を支配する法則を設定することに限定される。理神論者の神はそれ以後のことに一切干渉せず、人間界の事柄に特別な関心をもっていないのも確かだ。

理神論者は、彼らの神が祈りに応えず、罪や懺悔に関心をもたず、私たちの考えを読みとったりせず、気まぐれな奇跡によって干渉したりしないという点で有神論者と異なる。

理神論者は、彼らの神が、汎神論者の神のように宇宙の法則の比喩的あるいは詩的な同義語ではなく、ある種の宇宙的な知性である点で汎神論者と異なる。

- c. 汎神論者 (pantheist) は、超自然的な神をまったく信じないが、神という単語を、超自然的なものではない〈自然〉、あるいは宇宙、あるいは宇宙の仕組みを支配する法則性の同義語として使う。

汎神論は潤色された無神論なのであり、理神論は薄めた有神論なのである。

この中でドーキンスがとりわけ批判するのは、当然有神論である。

2. 神がいるという仮説

「一つの時代の宗教は、次の時代の大量文学である」

ラルフ・ウォルド・エマーソン

本章でドーキンスは、神に対するもう一つの見方である不可知論を二つに分けて紹介している。

- a. TAP[temporary agnosticism in practice]実践上の一時的不可知論
→是か非かについて本当ははっきりした答えがあるのだが、現在はそれに到達すべき証拠が欠如しているようなケースで採られる。
- b. PAP[permanent agnosticism in principle]原理的に永遠の不可知論
→どれだけ多くの証拠を集めようとも、そもそも証拠という概念が適用できないために答えられない問に採られる。「一例をあげれば、あなたが見ている赤が私の見ている赤と同じかどうかという言い古された哲学的問いがそうだろう。ひょっとしたら、あなたが見ている赤は私の緑かもしれないし、私が想像するどんな色ともまったく違ったものかもしれない」

さて、神の存在についての不可知論はTAPに属するものである。何故ならば神の存在証明は科学的な疑問であり、いつの日か私たちはその答えをやる事ができるかもしれない

ないからだ。

そして PAP ではなく TAP であれば、その蓋然性（確率）の推定値は得られるかもしれない。

そこでドーキンスは7つの段階を設けた。

- 1) 強力な有神論者。神は100%の蓋然性で存在する。C.G.ユングの言葉によれば『私は信じているのではなく、知っているのだ。』
- 2) 非常に高い蓋然性だが、100%ではない。事実上の有神論者。『正確に知ることはできないが、私は神を強く信じており、神がそこにいるという想定のもとで日々を暮らしている。』
- 3) 50%より高いが、非常に高くはない。厳密には不可知論者だが、有神論に傾いている。『非常に確率は乏しいのだが、私は神を信じたいと思う。』
- 4) ちょうど 50%。完全な不可知論者。『神の存在と非存在はどちらもまったく同等にありうる。』
- 5) 50%以下だが、それほど低くはない。厳密には不可知論者だが、無神論に傾いている。『神が存在するかどうかはわからないが、私はどちらかといえば懐疑的である。』
- 6) 非常に低い蓋然性だが、ゼロではない。事実上の無神論者。『正確に知ることはできないが、神は非常にありえないことだと考えており、神が存在しないという想定のもとで日々を暮らしている。』
- 7) 強力な無神論者。『私は、ユングが神の存在を“知っている”のと同じほどの確信をもって、神がないことを知っている。』

その上で、科学による追求を行えば限りなく7に近い6になると断言している。

3. 神の存在を支持する論証

「神学の教授が、われわれの憲法に占めるべき場所はない」

トマス・ジェファーソン

神の存在を支持する論証は多く為されてきたが、本章ではその代表的なものを挙げ、かつ批判している。

a. 先験的（ア・プリオリ）なもの

→アンセルムスの存在論的証明——我々は「可能な存在者の中で最大の存在者」を思惟することができる。ところで「任意の属性Pを備えた存在者S」と、「Sとまったく同じだけの属性を備えているが「実際に存在する」という属性（これをSは備

えていない)を余計に備えている存在者S'」では、S'のほうが大きい。よって「可能な存在者の中で最大の存在者」は(最大の存在者であるためには、論理的必然として)「実際に存在する」という属性を持っていなければならない。ゆえに「可能な存在者の中で最大の存在者」は我々の思惟の中にあるだけでなく実際に存在する。ところで、可能な存在者の中で最大の存在者とは神である。したがって、神は我々の思惟の中に存在するだけでなく実際に存在する。

⇨「存在するものこそ完全なものである」という教義は、驚くほど如何わしい。私の将来の家が断熱設計であれば、そうでないよりもいい家になるだろうと言うのであれば、それは正しい。しかし、「もしその家が存在していれば、存在していないより良い家になるだろう」というのは、何を意味するのだろうか？

かくも重大な結論を、こんな言葉の綾のような詐術から引き出すことができるという考え方そのものがナンセンスである。

b. 帰納的(ア・ポステリオリ)なもの：世界の観察に基づく

→トマス・アクィナスの5つの証明

1. 不動の動者——どんなものも、それに先立って動かすものがいなければ動かない。何かが最初の動きを作る必要がある($A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D \rightarrow E \rightarrow F \dots$)、成り立ち得ないはずのそのAこそが神である。

⇨退行というアイデアに依拠しているが、それに終止符を打つために神を無理やり引っ張りだしたに過ぎない。神の存在を必要とするというだけの理由で、無限の退行に終止符を打つ者を勝手気ままに呼び出し、神と名づけているだけである。

2. 原因なき原因——どんなものも、それ自体によって引き起こされることはない。第一の原因がなければ世界は存在し得ないが、第一の原因は自然には存在し得ない。それこそが神である。

⇨1に同じ。

3. 宇宙論的論証——いかなる物理的な事物も存在しなかった時があったはず。しかし、物理的な事物は現在存在しているから、それは存在に至らしめた非物理的な何か(すなわち神)が存在した証明である。

⇨1に同じ。

4. 度合いからの論証——私たちは世界の事物に違いがあることに気づいている。例えば善にはさまざまな度合いがある。しかし我々はそうした度合いを最大度の者との比較によってのみ判断する。そして人間は善悪どちらでもありえるから、最大の善は人間の中には存在しない。よって完全さの基準を定める何らかの最大者(すなわち神)が存在するはずである。

⇨善を他のどんな言葉に言い換えても通じる²。

5. 神学的な論証、あるいは設計を持ち出す目的論的論証——世界の事物、殊更生物は目的を持って設計されたかのように見える。我々の世界には、目的を持って設計されなかったのに設計されたように見えるものはない。よって設計者（すなわち神）が存在する。

⇨ダーウィニズムの一言で片が付く。すなわち、周囲の環境という目的に適応したものだけが生き残った（自然淘汰・適者生存）のだから、目的にそぐわない者は存在しないように見えるのだ。

4. ほとんど確実に神が存在しない理由

「さまざまな宗派の聖職者たちは、……科学の進歩を、魔女が陽の光の到来を怖れるように恐れ、自分たちの生業を成り立たせている詐術の一部を手放さなければならぬことを告げる致命的な予兆に顔をしかめる」

トマス・ジェファーソン

何世紀にもわたって、人間の知性にとっての最大の難事だったのが、この宇宙、生物がいかにして、複雑で一見設計されたとしか思えないような、在り得ない姿を持つに至ったかを説明することであった。

「設計されたかのような姿が生じたのは、実際に設計されたからだ」と考えたくなるのは自然なことである。例えば時計などの工作物の場合、設計者は実際に知的な技術者である。同じ論理をトンボの翅や鷺の目、あるいは人間に当てはめて設計者が存在すると考えるのは確かに心をそそられる。

しかし、それは誤りである。何故なら、設計者仮説は「その設計者を誰が設計したのか」という大きな問題を孕んでいるからである。我々が手掛けようとする問題のほぼ全ては、「我々は統計学的な非蓋然性をいかに説得力のある形で説明するか（アブダクション³）」というものである。

そしてこれまでに発見されている中で、最も説明に適しているのがダーウィニズムである。ダーウィニズムは、生物が存在するという統計学的な在り得なさ⁴と、設

² 「人々は胡散臭さの度合いが異なる。しかし我々は胡散臭さの度合いを完全な最大度に胡散臭いものとの比較によってのみ判断できる。我々人間の中には究極の胡散臭さは存在しない。したがって、最大限胡散臭いものを神と呼ぼう」

³ ある現象 X の説明には A という理由が必要である→故に A だから X だ。

⁴ 有神論者に最も用いられるのが、目的論的論証に非蓋然性を組み合わせたものである。「現状が神の存在無しには在り得ない」というこの論証は、しばしばボーイング 747 という例

計されたようにしか見えない生物が、単純な発端から如何にして、ゆっくりと時間をかけながら進化してきたかを示してきた。

これに従えば、神はほぼ間違いなく存在しないと言えるだろう。

5. 宗教の起源

「時間・痛み・困窮というコストをとともなうにもかかわらず、普遍的に見られる過剰な宗教的儀礼は、進化心理学者にとって、マンドリルの赤いお尻のように鮮やかに、宗教が適応的なものであることを示すものであるにちがいない」

マレク・コーン

およそすべての文化が宗教を有しているのは何故だろうか。

宗教は時間やエネルギーを消費し、しばしば過度に装飾的である。信心深い人間の生活を危険に晒すだけでなく、他の人間の生活をも危険に晒すことがある。無数の人間が宗教への忠誠心のために拷問され、多くの場合、どこが違うのかほとんどわからない別の信仰を持つがゆえに狂信的な他教徒の迫害を受けてきた。すなわち、極めて非効率的な存在であるといえる。

そんな宗教をドーキンスは「他の何かの副産物である」と論じている。

蛾に代表される多くの虫達は炎に飛び込んでいく。それは偶然ではなく、彼らはわざわざ炎にその身を捧げているのだ。しかしこれは自殺ではない。一見自殺に見えるが、これは他の行動の不本意な副産物なのである。

人工的な光源が人類にこれほど多く用いられるようになったのは最近のことだ。それまで、夜間の光といえば月と星であり、これらはコンパスとして用いるのに優れている。しかし炎のような光源が存在し、蛾は炎の発する光を月光と錯覚した場合、無常にもその中へ飛び込んでいく。

この特殊な状況下において焼身自殺行動は致命的だが、蛾のこの経験則は平均的には上手くいく。何故なら蛾にとって、月を見ることに比べれば蠟燭の炎を見ることははるかに稀なことだからだ。

蛾の焼身自殺は普段であれば役立つコンパスが「誤作動」した「副産物」なのである。

によって語られる。すなわち、「地球上に生命が起源する確率は、台風がガラクタ置き場を吹き荒らした結果、運良くボーイング 747 が組み上がる確率よりも小さい。神がいると考えなければ、このような数奇な状況を説明することはできない」というものだ。

さて、人類が示す宗教的な行動に対して、この「副産物」という考えを応用するとどうなるか。膨大な数の人間が、実証可能な科学的事実にはっきりと矛盾するような信仰を抱き、また競合する他の宗教も他の人々に同じように信奉されている。彼らは信仰のために死に、そして殺す。これはまるで蛾の焼身自殺と同じである。

こういった非効率的な宗教的行動は、別の状況では有益な、あるいはかつて有益だった、私たちの奥底にある性向の不幸な誤作動、副産物なのではないだろうか。すなわち、私たちの祖先の時代に自然淘汰によって選ばれた性向は、「宗教そのもの」ではなかったことになる。

では、宗教がXの副産物だとすれば、Xとは何なのだろうか？

ドーキンスいわく、それは「子供に関するもの」である。人間は先行する世代の蓄積された経験によって生き延びる強い傾向を持っており、その経験は子供の幸福及び種の保存のために効率的に子供たちに伝えられる必要がある。それに第一に必要なのは、「大人の言うことは信じよ」という経験則である。これにより、一応は経験則を有した子供たちの生き残る確率は上がり、世代を追うに連れて有さないものが排除されていく⁵。そこから自動的に導かれるのは、「信じやすい人間は、正しい忠告と正しくない忠告を区別する方法を持たない」ということだ。

結果として、数々の利益とともにもたらされるのが、非合理的な存在にまで及ぶ「妄信」なのである。

6. 道徳の根源——なぜ私たちは善良なのか？

「奇妙なのは、ここ地球上における私たちの状況である。私たち一人一人は、わけも知らないまま、束の間この星に滞在するだけだが、ときには、目的を察知しているかのように見える。けれども、日常生活の観点からすれば、私たちにわかっていることが一つだけある。すなわち、人間はほかの他の人々のためにここにいるということである。——とりわけ、その人たちの笑みと安寧に、私たち自身の幸福がかかっている人々のためにである」

アルバート・アインシュタイン

宗教批判者に向けられる意見の一つとして、「宗教がなければどうして我々は善良でいられようか」というものがある。

これに対してドーキンスは、生物学及び倫理（いささか感情的で主観的ではあるが）という2つの観点から答えを出している。

⁵ ドーキンスはただの考え方の伝播に限らず、その脳にまで影響を与えるだろう、と述べている。

a. 利他的行動と利己的遺伝子

ドーキンスによれば、遺伝子は利己的である。この場合、利己的というのは「自己の生存・繁殖率を如何にして上昇させるか」が至上命題であるということである。

一目見ただけでは、利己的と道徳は相反するものではないと読み取れるが、実際にはそうではない。

生物学的に、個人が互いに対して利他的で道徳的である事の理由は4つある。第一に、遺伝的な血縁という特殊な場合⁶。第二に、恩恵へのお返し及びそのお返しを予測した上での恩恵の付与（互惠性）。第三に、気前よく親切であるという評判が伝わることの利益⁷。第四に、自身の相手への優位性を示すための行動。

すなわち、我々は宗教以前の遺伝子レベルにおいてすでに「道徳的」なのである。

b. 有神論者が「神がいなければ道徳が欠落する」という事の自己矛盾

「宗教がなければどうして我々は善良でいられようか」という問いに、ドーキンスはこう答える。

「あなたは本気で、自分が善人であろうとつとめる唯一の理由が神の賛同と褒美を得ること、あるいは避難や罰を避ける事だとおっしゃるのですか？ そんなものは道徳ではなく、単なるご機嫌取りかゴマすりであり、空にある巨大な監視カメラを肩越しに伺ったり、あるいはあなたの頭のなかにあつて、あなたのあらゆる動きを、あらゆる卑しい考えさえ監視している小さくて静かな盗聴器を気にしているだけじゃありませんか」

もし神が不在であれば自分は罪を犯すということに同意するのなら、それは不道徳なことの暴露である。反対に、もし神の監視がなくとも自分は善人であろうとつとめるなら、私たちが善人であるには髪が必要だという論理は突き崩されるのである。

7. 「よい」聖書と移り変わる「道徳に関する時代精神」

「政洽は何千人も殺してきたが、宗教はその何十倍もの人間を殺してきた」

ショーン・オケーシー

聖書は世界中で道徳ないし生き方のルールの典拠になっている。第一に、例えば十戒

⁶ 自己の遺伝子に親しいと思われる血縁者の保護は「利己的」につながる。

⁷ これは高度なコミュニケーション能力が発達した人類に限られるが。

⁸などの形で、直接的な生活規範を明文により指示することによって。第二に、神や聖人達がロールモデルを示すことによって。

ドーキンスは、どちらの道を辿ったとしても聖書に準拠する限り、「文明化されたあらゆる現代人が醜悪と感じるような道徳体系を推奨することになる」と述べている。その理由として、①聖書の内容に理性的には同意できないものが多く存在する事、②聖書は何百人という著者によって数世紀にわたって編纂・翻訳・歪曲されてきた支離滅裂な文書を雑然と寄せ集めてこしらえ上げたアンソロジーであって、それから予想されるように内容は奇妙としか形容しようがない事を挙げている。

本章では上記の意見に従って、聖書の内容をこき下ろす文が延々と続く。

8. 宗教のどこが悪いのか？ なぜそんなに敵愾心を燃やすのか？

「宗教は実際に、毎日毎秒あなたのするすべてのことを観察している目に見えない——天空で暮らしている——人間が存在すると人々に信じこませてきた。そして、その目に見えない人間は、あなたにしてはしくない 10 の事柄の特別なリストを持っている。そしてもしあなたがその 10 のうちのどれかをおこなえば、彼は火や煙、灼熱、拷問、苦悩などに満ちあふれた特別な部屋をもっていて、あなたをそこへ生きたまま送り込み、時の終わりが来るまで永久に苦しめ、焼き焦がし、息を詰まらせ、泣き叫ばせる……だが、彼はあなたを愛しているのだ！」

ジョージ・カーリン

これまで痛烈に、妄執といえる程に宗教を批判してきたドーキンスだが、本章ではそんな宗教への敵愾心の理由を挙げている。

宗教は科学的な営為を積極的に墮落させる。それは人類に、知を望むことの禁忌性を説くのだ。何故ならば聖典の真理は論理学で言うところの公理であって、推論の過程によって生み出される産物ではない。原理主義者にとっては聖典こそ真理であって、もしもとある証拠がそれと矛盾するように思えるならば、捨て去るべきはその証拠であり、聖典ではない。

そしてそのような傾向は、宗教が深く根ざす現代社会制度においても見出すことができるのだ。

⁸ わたしのほかに神があってはならない。あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。主の日を心にとどめ、これを聖とせよ。あなたの父母を敬え。殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。隣人に関して偽証してはならない。隣人の妻を欲してはならない。隣人の財産を欲してはならない。

例えば、同性愛者への社会的態度である。少々極端な例だが、タリバン支配下のアフガニスタンでは同性愛への正式な罰則は「囚人の体の上に戦車で分厚い壁を倒して生き埋めにする」というものだった。同性愛は成人同士によって合意の上で行われる、個人的かつ他者に危害を与えないものである、にも関わらずだ。

アメリカにおいてもこのような態度は見受けられる。社会制度ではないが、パット・ロバートソン⁹はこう言っている。「同性愛者たちは教会に入り込み、教会の職務を崩壊させ、血をあたりかまわず吹き散らし、人々にエイズを移し、聖職者たちの顔に唾を吐きかけたいと願っている」「家族計画は子供たちに姦淫を教え、人々に不倫、あらゆる種類の獣姦、同性愛、聖書が非難するあらゆることをするように教える」。

他の多くの社会においても、こうした「宗教的根拠に根ざした非合理的な原理主義的差別」は枚挙に暇がない。

9. 子供の虐待と、宗教からの逃走

「どの村にも、灯りをともす教師と、灯りを消していく聖職者がいる」

ヴィクトル・ユーゴー

より一般的に言えば、真に有害なのは「子供に信仰そのものが美徳であると教えること」である。信仰は、それがいかなる正当化の根拠も必要とせず、いかなる議論も許さないという、まさにその理由によって悪なのである。子供に、宗教は疑問を抱く余地もない絶対的な美徳であると教えることは、彼らに将来のジハードまたは十字軍のための潜在的な凶器となるべく育つ素地を与えてしまう。ノーベル賞を受賞したアメリカの物理学者スティーヴン・ワインバーグは「宗教は人間の尊厳に対する侮辱である。宗教があってもなくても、善いことをする善人はいるし、悪いことをする悪人もいるだろう。しかし、善人が悪事をなすには宗教が必要である」と論じている。

そして子供たちは、そういった教えを、必ずしも狂信的な過激主義者によってではなく、穏健な正統的宗教指導者から教えられるのだ。

現状を打開する方策としてドーキンスが考えているのは、「子供の宗教教育からの解放」である。ほとんどの人間は幼い時に親の宗教の影響を受けて信仰を持つに至る。五章でも述べられているように、子供は、先行する世代の教えに教化されやすいという生得的な傾向を持っている。

もし、あらゆる科学的証拠に公正かつ適切に晒されてさえいれば、子供たちは成長し

⁹ 彼は1988年に共和党から立候補し、300万人の支持を集めた。

てから、聖書が正しいかどうかを自分で判断するだろう。それは彼らの特権であって、その結果に口出しする筋合いはない。しかし、親には圧倒的な力でそれを押し付ける権利など存在しないのである。そしてこれは、彼らがどのように育てられたとしても、自分の育てられ方をそのまま伝える立場になるということを考えた際に、とりわけ重要なのだ。

10. 大いに必要とされる断絶?

「100 インチ望遠鏡を通してはるか彼方の銀河をのぞきこむ。一億年前の化石や五十万年前の石器を手にもつ。グランドキャニオンのはてしない空間と時間の深淵の前に佇む。あるいは宇宙創造の様相をじっと凝視して瞬きもしない科学者の言葉に耳を傾ける。そういったこと以上に、魂を揺さぶることができるものが何かあるだろうか? これこそ深く聖なる科学なのだ」

マイケル・シャーマー

脳には、神によってつくられた満たされるべき隙間があるということがよく言われる。つまり、私たちは髪を求める心理的欲求を持ち、神が実際に存在しようとしまいと、その欲求は満足させられなければならないというのだ。しかし神は、私たちが他の何かで満たしたほうがよいような隙間を塞ぐ邪魔者と言うことはないだろうか?

いつからか、宗教は人間生活において説明・訓戒・慰め・インスピレーションという4つの重要な要素を満たすものと考えられてきた。歴史的に、宗教は我々の世界や存在理由などの説明役を担ってきた。しかし、この役割は現在では科学に取って代わられている(第四章)。

訓戒とは私たちの道徳上指針のことであり、これも生物学を以て論ずることができている(第六章)。では、残る二つはどうだろうか。

a. 慰め

→例えば死を恐れている人にとって、不死の魂を持つという真摯な信仰は慰めを与えるだろう。偽りの信念は、その幻想が崩壊するまで、素晴らしい慰めを与えてくれる。しかし、信仰を持つ人は何故、死に瀕する人の前で死(すなわち不死の魂の旅立ち)を祝わずに、かえって悲しみに暮れるのだろうか。

加えて、老人ホームにおける調べでは、信仰を持った人間はそうでない人間よりも死を恐れているという。これは死にゆく者に慰めを与えるという宗教の効果に疑問を残す結果である。

b. インスピレーション

→想像力においては個人的判断が大きい。もし神の消滅が隙間を残すのであれば、それぞれの人違ったやり方でそこを埋めるだろう。ドーキンスのやり方では、科学を用いた、真実発見のための体系的な営みが欠かせない。

私たちはおよそ十分の一ミリメートルから数キロメートルの大きさに慣れ親しんでいる。この範囲の外では、我々の想像力は弱まり、さまざまな助けを必要とする。ドーキンスにとっては、如何なる宗教的なインスピレーションよりも、科学を用いた自己の視認範囲の拡大こそがインスピレーションの最大化に繋がるのである。

11. むすびに

これほど科学化された現代社会においても、社会生活の端々で宗教はその息吹を感じさせる。日常のちょっとした仕草に、行動する時の指標に、そして政治的決定においてさえ。

宗教は理不尽だ。信仰には理屈がない。しかし恐らく存在しないだろう神は、合理的であるべき社会制度にもその影響を与えている。

我々雄辯部員は、およそ社会を語る。社会を語る限り、宗教に対して向き合わなければならない時がきっと来る。その時宗教が擁護すべき対象か、批判の対象か、関係性を明らかにするために鳥瞰すべき対象か、それは分からない（個人的には社会問題に対して理性を以て臨むのであれば、おそらく宗教は敵として眼前に立ちはだかるだろうと思うが）。

しかし確かに来るであろうその時に、本読書会の打ち込んだ楔が何らかの形で思考の一助になれば幸いである。

12. 参考文献

○リチャード・ドーキンス『神は妄想である』（2007）早川書房

以上